

ロシア食材を扱うスーパー（ハイファ）。ヘブライ語とロシア語が併記。



「ことば」で「たたかう」

細田和江

ほそだ かずえ / 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員、AA研特任助教

世界各地から集まったユダヤ人と、ももとの住民であるアラブ人が暮らす多文化社会のイスラエル。バイリンガル／トリリンガルが当たり前のこの社会では「ことば」をめぐるさまざまな「衝突」に出会う。



イスラエルの道路標識。上からヘブライ語、アラビア語、英語表記。



バスステーション近くにあるエチオピア系の洋品・雑貨店（テルアビブ）。

「インディ・ハフサカ」（「私休みなの」）

「アハラン!」、「ヤッラ」（「やあ!」、「さあ、行こう」）

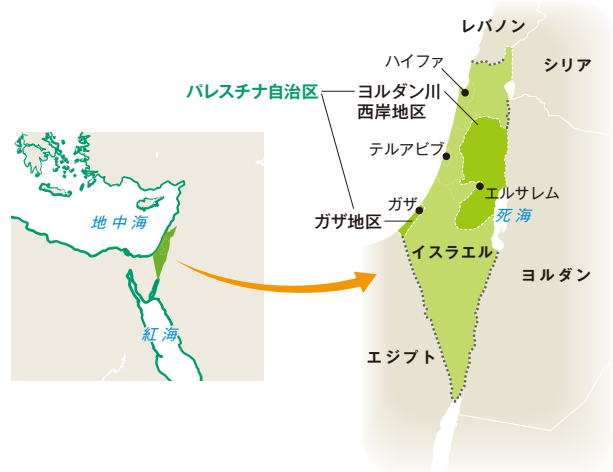
一つ目の表現は、大学のキャンパスで見かけたアラブ人女子学生の会話に出てきた。アラビア語で「私は持っている、～がある」の意味の「インディ」とヘブライ語で「休憩、おやすみ」の意の「ハフサカ」が交じた表現だ。その後も彼女たちは「シワール」（授業）、「メオノット」（学生寮）など、ヘブライ語の単語交りでのアラビア語で会話を続けていた。ヘブライ語とアラビア語はもともと同じセム語系の言語で共通する表現や単語も多い。しかしイスラエルのアラブ人は、こうした共通点とはまったく別の文脈で多くのヘブライ語単語を交えて話す。

二つ目はユダヤ人が発したことばである。多少の知識があれば、「アハラン」がアラビア語のバレスチナ方言のあいざつで、「ヤッラ」は何かを始めるときや動き出すとき／せかすときのアラビア語の掛け声だということに気がつく。こうした表現をユダヤ人たちはスラングとして気軽に使っている。

「ことば」のモザイク

イスラエルの公用語はヘブライ語とアラビア語だが、基本的にはヘブライ語の世界である。二つの公用語は決して対等ではない。けれども耳をすますと、街からはアラビア語などさまざまな「ことば」が聞こえてくる。例えば、小さいながらもエルサレムの旧市街にコミュニティを維持しているアルメニア人はアルメニア語を話す。エチオピア料理店ではアムハラ語が使われ、シリア語で典礼を行う教会もある。ユダヤ教の宗教学校からは東欧で使われていたユダヤ人の言語イディッシュ語の囁きが聞こえ、1991年のソ連邦崩壊を契機にやって来たユダヤ人が集住する地区にはロシア語世界が広がっている。バックパッカーの日本人観光客が、エルサレム旧市街の安ホテルで「ありがとう」が「シュクラン」（アラビア語）だと習って、それを数十メートル先のユダヤ人地区で披露して怪訝な顔をされた、というような話には事欠かない。

今では「国語」となったヘブライ語は長らく典礼語としてのみ使用されていた。それが建国以前のバレスチナのユダヤ人社会で、さまざまな障害を乗り越えて共通語となった。



19世紀末、ユダヤ人には祖国が必要であると説いた「シオニズムの父」テオドール・ヘルツルは、新たに誕生するユダヤ国家には公用語など必要なく、スイスのような複数言語が並存すべきだと語った。ここで彼の言う複数言語とはドイツ語や英語のことであり、当時まだ日常語として確立しておらず「話者のいない」ヘブライ語や、東欧のユダヤ人コミュニティで用いられている「ゲットー語」＝イディッシュ語などは、ヘルツルの想定範囲外であった。また、1920年代、バレスチナ初の大学となるはずだったハイファの工科大学は、講義言語を英語・ドイツ語にするかヘブライ語にするかで議論が紛糾したために開校が数年遅れた（バレスチナ初の大学は1925年開学のエルサレムのヘブライ大学）。

さらに敬虔なユダヤ教徒の中には、聖なる言語であるヘブライ語で日常会話を行うことに対して反発するものもいた。つまり、ユダヤ人の間でもヘブライ語がユダヤ人の共通語にふさわしいかどうかは長らく意見がわかれていた時代を経て、国家の共通語となったのである。

「ことば」を武器として

イスラエル／バレスチナは70年ものあいだ土地をめぐる争いが続く、誰もが知る紛争地である。一般的にはアラブ人とユダヤ人の戦いもしくはイスラームとユダヤ教のあいだの宗教紛争と捉えられがちなのが、現実はその単純なものではない。ユダヤ人の国家と言われているイスラエルの市民には、イスラエル建国時に離散しなかったアラブ人もい



エルサレムのユダヤ人地区にいたアラブ人女子学生。

* P16、17に掲載している写真はすべて著者撮影

テルアビブ大学のオープン・キャンパスにやってきたアラブ人の高校生。



エチオピア料理のレストラン(エルサレム)。



イスラエル政府によるアラブ人家屋破壊に反対し、アラブ人とユダヤ人の共存を訴えるデモの参加者(テルアビブ)。

て人口の二割を占めている。そのアラブ人のなかにはムスリムに限らずキリスト教徒やドルズ派もいる。他方、世界各地から移民してきたユダヤ人には、ホロコーストを生き抜いたポーランドやドイツのユダヤ人もいれば、バビロン捕囚以来のコミュニティの一員だと誇りを持っているイラクのユダヤ人の末裔もいる。移民当初、ヨーロッパ出身のユダヤ人はドイツ語やフランス語など各地の言語を話し、イラクをはじめアラブ諸国から移民したユダヤ人の母語はアラビア語であった。食事をはじめ生活のすべてでユダヤ教の戒律を守っている人もいれば、宗教実践をほとんど行わないユダヤ人もいる。つまり、ユダヤ／アラブ、あるいは宗教・民族・言語の区別は曖昧で、対立構造は複雑に絡み合っている。

1966年イスラエルのアラブ人作家アッター・マンスールが母語のアラビア語ではなく、多数派言語のヘブライ語で小説を書き始めて以来、ヘブライ語で創作を行うアラブ人作家が登場する。そのうちの一人アントン・シャンマースが発表した『アラベスク』(1986年)は、イスラエルのみならず欧米でも注目を集めた。パレスチナを舞台に、20世紀初頭、成功を夢見てアルゼンチンに移民した若者、バイルートからパレスチナに嫁いできた娘など、オスマン朝期から現代までおよそ100年あまりのアラブ人の伝統的な暮らしや人びとのさまざまな生が描かれた作品は、アラビア語の単語を散りばめた格調高いヘブライ語で書かれており、今では現代ヘブライ文学の傑作の一つと評されている。

この小説には、主な舞台となるファッスータ村の成り立ちを登場人物に語らせている箇所がある。

僕たちの村はファッソーブという十字軍の城跡に造られた。そしてそのファッソーブは、司祭階級であるハリーム家が第二神殿の破壊の後に住み着いたユダヤ人の村、ミフシャタの跡地に築かれていた。彼らは十分の一税と安息年(その時は土地を休耕しなければならない)に付随する戒律を無効にした。そしてそれゆえ、審判によって四つの罰を受けた。疫病と戦争、飢饉、捕囚という罰を。

このファッスータ村の変遷のくだりには、イスラエル国家がユダヤ教の聖地であると同時に、キリスト教やイスラームの聖地で、古くからさまざまな権力が立ち替わり治めてきた地に誕生したことが重ねられている。レバノン国境に近いこの実在する村は、シャンマースの小説によって広くユダヤ人に知られることとなり、一躍有名になった。

母語＝アラビア語の代わりに多数派／支配側の言語(「継母」の言語)＝ヘブライ語を使って自分たちアラブ人の世界を描く彼らの試みを「言語戦争」と呼ぶ人もいる。アラブ人が書くヘブライ語の文学は、内容よりむしろ作品自体が含むアイデンティティの問題に話題が集中し、単なるプロパガンダとして批判される

ことも多い。実際、先のシャンマースは作品に端を発した論争に巻き込まれて筆を折り、ここ数年の若手人気作家の一人であったアラブ人作家サイイド・カシュアアは、イスラエルでの将来に絶望し国を離れた。

彼らの挑戦は「負け戦」と言ってしまうとそれまでかもしれない。けれども彼らが小説を書くまでは、イスラエルの内部にいるアラブ人の存在はほとんど注目されていなかった。こうした作家たちをはじめ多くのアラブの文化人たちがヘブライ語世界に挑戦することによって、イスラエル社会の内部にアラブの文化が存在すること、その文化の豊穡さを人びとに気づかせたこともまた確かであり、こうした試みは映画、音楽、演劇の世界にも広がっている。

私が初めてイスラエルを訪れてからおおよそ20年。暴力の応酬によるお互いの不信感からパレスチナとイスラエルの和平交渉は暗礁に乗り上げている。言語や文化の枠を乗り越え相互に越境することで、多文化を受け入れる素地を作る。ユダヤ人作家エトガル・ケレットも「紛争」の反対語は「平和」ではなく、お互いを理解した上の「妥協」だと語る。イスラエルの作家たちは、「ことば」を使って共通語＝妥協点を探し続けている。言語文化の多様性が他者への寛容と想像力を生むことを信じて。